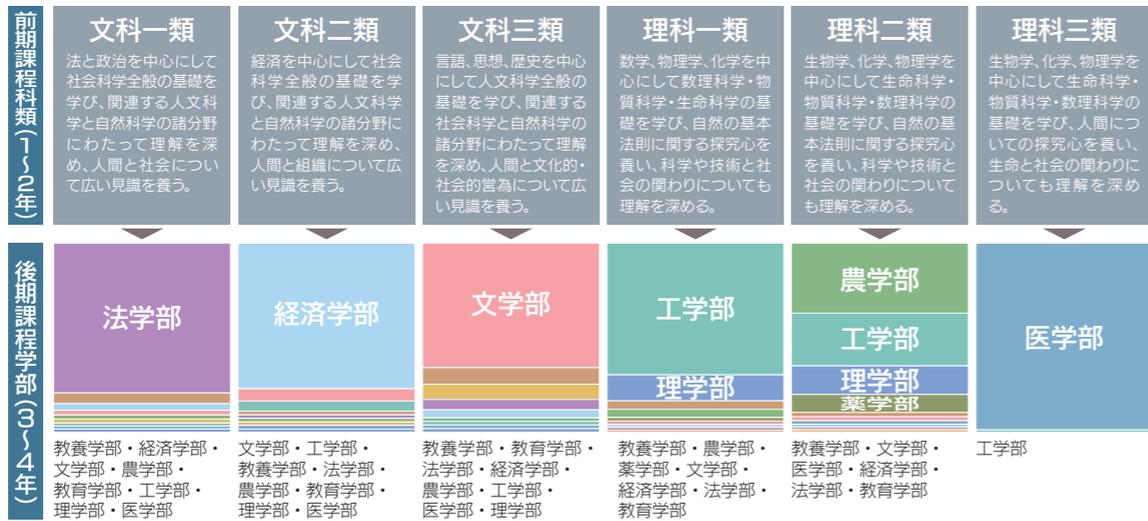




## 六科類の特徴と学部進学との関係 (『東京大学で学びたい人へ2026』より作成)



※前期課程の各科類から主として進学できる後期課程の学部は上記の表のとおりですが、すべての科類からどの学部にも進学できる枠「全科類枠」が設けられています。

※令和7年4月実績にもとづく



もりやまたき  
森山工理事・副学長  
1984年東京大学教養学部教養学科卒業。1994年同大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。専門分野は文化人類学。東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長、東京大学執行役・副学長などを経て現職。

東京大学が「大学」である以上、さまざまな分野の学知を学び、深めることは当然のことです。もちろん東京大学でも、入学した当初の学生の特定化された学術分野への関心や志向性を大切にしています。けれども、そうした関心や志向性を踏まえつつも、それ以外の学術分野に学生を晒すことで、学術分野とはこれほどに多様なのだということ、そして、それらの多様な分野の協働によって、さらに新たな学術分野が立ち現れるということを学生に体得してもらおうとしています。

これは学術分野の多様性に学生を晒すということですが、ひとたびキャンパス生活に参入したならば、多様性はさまざまな局面で見出すことができます。出身地域の多様性。出身文化や言語の多様性。国籍の多様性。ジェンダーや性自認の多様性。年代の多様性。障がいの有無やそのあり方についての多様性、などなど。

学術分野の多様性を架橋するのみならず、そうした「多様な多様性」を意識化し、その多様性を感応力をもって受け止めるには、何よりも他者に対する共感力が必要です。

ですから、東京大学は学知の深化にとどまらないキャンパス生活を学生に提供しようとしています。学術分野の架橋というのは学知の領域のことからです。けれども、それを踏まえつつ、「多様な多様性」に感応しながら、それらを架橋して他者への共感力をはくむこと。東京大学はそのような学修環境をこれからも充実させてゆきます。

# 東京大学

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 入試事務室 TEL 03-5841-1222 <https://www.u-tokyo.ac.jp/>

## 学知を深めつつ、多様性への感応力と他者への共感力をはくむ

### 学部段階で3つの基礎力を鍛える

藤井輝夫総長が就任初年の2021年度に公表した「UTokyo Compass 多様性の海へ」対話が創造する未来」は、東京大学が目指す理念と基本方針です。「多様性と包摂」の理念を重視し、東京大学を「世界の誰もが来たくなる学問の場」にしていくことを目指しています。

藤井総長が特に大事にしている「対話」を通じて新しい大学モデルを構築します。

ここでの「対話」とは、単なる情報交換ではなく「知るための実践」であり、そのためには「問いを立てる力」が必要とされ、「ともに問う」ことで対話が深まることとなります。

対話を通じてともに問題に向き合い、感じ、考えることで理解と信頼が育まれます。対話は多様な声が響き合う協奏であり、未来を創造するには不正や差別への感受性と、課題に真摯に向き合う姿勢が求められます。教育においては、東京大学がこれまで人類が受け継ぎ発展させてきた学

問の蓄積を学ぶだけでなく、このような「対話」の実践を通じて、新たな「知」と「人」と「場」を統合する活動を目指します。これにより、より良い未来社会の創造に貢献する人材を輩出していきます。

東京大学は、特に学部段階では「自ら原理に立ち戻って考える力」「忍耐強く考え続ける力」「自ら新しい発想を生み出す力」という3つの基礎力を涵養します。そのために、学生が最初の2年間を過ごす教養学部前期課程において、基礎科目、展開科目、総合科目、主題科目の4つの科目群で、我が国唯一の多様な授業科目を提供しています。

さらに、学生の国際感覚を鍛えます。世界の多様な人々と共に生き、共に働く力の育成にも力を入れています。東京大学は、学生の主体的な学びを促し、世界の舞台で活躍する力を養成する先進的な取り組みをいくつも用意しています。

### 幅広い教養教育で後期課程に向け「進学選択」

他大学に見られない東京大学の学部教育の大きな特徴は、入学時に専門を決めず、教養学部前期課程を経てから専門を選べる「Area Specialization」に基づく「進学選択制度」にあります。前期課程においては、リベラル

以外のどの科類からもそれぞれ一定数の進学を認める「全科類枠」もあります。

**初年次ゼミナールなどの特徴的な教育プログラム**

東京大学では、国際感覚を鍛える教育の充実や主体的な学びの機会の提供を進め、教養学部前期課程教育の活性化に継続的に取り組んでいます。その柱の一つが「初年次ゼミナール」です。

この授業は「教え授ける」(ティーチング)から「自ら学ばせる」(ラーニング)への転換」を目指した取り組みの一環として設計されました。大学に入学して最初のセメスターに開講される、全学生が受講しなければならぬ必修科目です。文科(文系生向け)・理科(理系生向け)とも、先端研究に取り組む様々な分野の教員が、専門性を活かした授業を展開しています。学生の積極的な参加を促すため、1クラス20名程度の少人数制で実施しています。ほとんどの授業に大学院生のTAが付き、

丁寧な指導が行われているのも特徴です。授業外にも能動的学習(ACTIVEラーニング)を支援する体制を整えています。学術文献の検索や研究倫理など、分野にかかわらず共通性の高い内容については共通教材や共通授業で取り上げます。

また、大学での学修を早期から伸ばすことを目的とした「アドバンスド理科」「アドバンスド文科」「アドバンスド文理融合」という科目群を用意し、例えば、量子コンピュータやデータ科学などの新しい学術分野における最先端の内容について、演習や討論を含めたインタラクティブな少人数授業を行っています。

### 英語教育など実践的な教育プログラム

前期課程では、英語教育においても学生の主体的な学びを重視する実践的なプログラムを実施しています。学術的な文章作成能力を養う少人数授業として、理科生向けの「ALESS」(Active Learning of English for Science Students)と文科生向

こうした英語による実践的なプログラムを後期課程でも継続できるよう、2023年度に設立されたグローバル教育センターが「グローバル

**(1) リベラルアーツ教育**

「東京大学憲章」にも掲げられているように、東京大学では学部教育の基礎としてリベラルアーツ教育を重視している。リベラルアーツを「種々の制約から自らを解放し、自由かつ柔軟に思考するための知識や技法」と定義したうえで、専門を学ぶ前は「これから学ぶ学問のための土台となり、真理探究の精神を涵養する」ものとして、専門を学んだ後は「自らの専門分野を相対化し、他分野や他者と関連づけながら柔軟かつ責任ある思考ができる素地を培う」ものとして、位置づけている。

**(2) グローバル教養科目 (GLA: Global Liberal Arts Courses)**

グローバル教育センターが提供する、現代の世界が直面する喫緊の課題を英語あるいはほかの言語で学ぶ授業科目。特に「SDGs」(持続可能な開発目標)に関する分野横断的なトピック(ジェンダー、ダイバーシティ、健康、貧困、GXなど)をテーマとする。交換留学生を含む全学部の後期課程学生・大学院生が履修でき、原則20名程度の少人数で、ディスカッションなどのインタラクティブな活動を中心に授業を展開される。

【グローバル教養科目ウェブサイト】  
<https://globe.u-tokyo.ac.jp/ja/globalliberalarts.html>

**(3) 国際総合力認定制度 (GGG: Go Global Gateway)**

東京大学では、世界の多様な人々と共に生き、共に働く力を「国際総合力」と名付けている。国際総合力認定制度(GGG: Go Global Gateway)は国際総合力を伸ばすために、どのような学びや体験が必要かを学生自らが入学後の早い時期から考え、行動することを基本とした制度である。国際的なアクティビティに取り組む、条件を満たした場合、国際総合力の基礎的な力を身につけたものとして認定証を授与する。単なる語学の堪能さや表面的な外国理解でなく、異文化や他者について深く考える教養と洞察力を修得する契機となることを目的としている。

**(4) 全学交換留学 (USTEP: University-wide Student Exchange Program)**

東京大学が学生交流覚書を締結している海外大学(協定校)と1学期~1年間、学生を交換する「交換留学」を大学全体で実施するのが「全学交換留学(USTEP)」である。東京大学が授業料を徴収せずに協定校の学生を受け入れる代わりに、東京大学の学生は東京大学に授業料を納めれば、留学先の授業料は支払わずに協定校で授業を履修したり、研究指導を受けたりとすることができ、全学交換留学は、資格条件を満たす学生であれば、どの学部・研究科の学生でも応募することが可能となっている。



駒場1キャンパス正門

